

沢の田遺跡

県営圃場整備事業に伴う沢の田遺跡発掘調査報告書

1 9 8 4

山梨県北巨摩郡
小淵沢町教育委員会

序 文

小淵沢町は山梨県の西北端に位置し、八ヶ岳山麓の上に當まれた町であり、自然の環境に恵まれその恩恵を受けてきた町です。又当町は山梨にああっても極めて多くの埋蔵文化財が残された地域で、埋蔵文化財の豊庫といつても過言ではありません。

さてこのたび岩久保地区県営圃場整備事業に伴ない、昭和58年4月12日より同年8月2日まで沢の田遺跡の発掘調査を実施いたしました。調査の結果、縄文時代の土器を伴なった住居址及土塙が検出され、小淵沢町の歴史に新しい貴重な資料を加えることができ意義深い成果をおさめることができました。この発掘調査で得られた土器や石器は今後、小淵沢町立郷土資料館に展示し、社会教育の場を通して生きた歴史資料として活用してゆく所存です。その意味においても本報告書が今後の文化財保護の資料として活用されまして郷土の文化財保存と研究のために多少なりとも寄与できることを願うものであります。

昭和59年3月

小淵沢町教育委員会 教育長 宮 沢 辰 雄

例　　言

1. 本書は小淵沢町岩久保地区県営國場整備事業に伴なう発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は小淵沢町教育委員会が主体となり、佐野勝広（国士館大学卒業）を担当者に1983年4月12日から1983年8月2日まで行なわれた。
3. 本書の作成は佐野勝広が行なった。
4. 写真は佐野勝広が撮影した。
5. 石器の石質については、小林公明氏（井戸尻考古館）に鑑定していただいた。
6. 発掘調査及び整理を通じて、次の方々、諸機関より有益な御指導、御助言を賜わった。記して深く感謝の意を表わしたい。
木本 健、坂本美夫、新津 健、米田明剣、長沢宏昌、保坂康夫、武藤雄六、小林公明
樋口誠司、山梨県立埋蔵文化財調査センター
7. 出土品は小淵沢町立郷土資料館で保管している。
8. 沢の田遺跡調査組織

調査主体者 小淵沢町教育委員会（教育長 宮沢辰雄）

調査担当者 佐野勝広（国士館大学卒業）

調査事務局 進藤幸夫（町教委社会教育係長）

発掘調査参加者（五十音順）

小林京子・小林きよ子・小林鈴子・小林つる代・小林まき子・坂口平吉・佐藤只雄・
佐藤良友・進藤芳郎・中山文友・中山千子・長坂みつえ・藤原みつ子

目 次

序 文	
例 言	
I 遺跡の立地と周辺の遺跡	1
II 調査の経緯と経過	2
III 遺 墓	5
1 住居址	5
2 土 壤	9
3 潟状遺構	11
IV 出土遺物	12
1 土 器	12
2 石 器	15
V ま と め	17
住居址について	17
土壤について	17
土器について	17

挿 図 目 次

第1図	遺跡の位置と周辺の遺跡	1
第2図	沢の田遺跡A地点、B地点	2
第3図	沢の田遺跡A地点遺構配置図	3
第4図	沢の田遺跡B地点遺構配置図	4
第5図	第1号住居址実測図	5
第6図	第2号住居址実測図	6
第7図	第3号住居址実測図	7
第8図	第4号住居址実測図	7
第9図	第5号住居址実測図	8
第10図	第6号住居址実測図	9
第11図	第6号住居址炉址実測図	9
第12図	土壤実測図	10
第13図	溝状遺構実測図	11
第14図	住居址出土土器実測図	13
第15図	住居址出土土器実測図	13
第16図	土壤出土土器実測図	14
第17図	住居址出土石器	16

図版目次

- 図版1 沢の田遺跡A地点・澤の田遺跡B地点・発掘風景
- 図版2 第1号住居址・第2号住居址・第2号住居址炉址
- 図版3 第2号住居址石匙出土状態・第3号住居址炉址
- 図版4 第4号住居址・第4号住居址炉址・第5号住居址
- 図版5 第5号住居址炉址・第6号住居址・第6号住居址炉址
- 図版6 第6号住居址炉址・第6号住居址遺物出土状態・第6号住居址石匙出土状態
- 図版7 第1号土壤・第2号土壤・第3号土壤
- 図版8 第4号土壤・第4号土壤遺物出土状態・第5号土壤
- 図版9 第6号土壤・第7号土壤・第9号土壤
- 図版10 第10号土壤・溝状遺構
- 図版11 住居址土壤出土土器
- 図版12 住居址出土土器

I 遺跡の立地と周辺の遺跡

1. 遺跡の立地

小瀬沢町は山梨県西北端の長野県境に位置し、東は女取川を境として長坂町に、西は甲六川を県境として長野県富士見町に、南は釜無川を境に白州町に接している。又当町は八ヶ岳連峰の権現岳を頂点とする南西傾斜の広大な台地に位置し、北から南にのびるくさび形を呈する。標高 620 メートルから 1100 メートルの地帯は緩かな斜面が続き、八ヶ岳の深い谷間から流れ出している甲六川、女取川の河川と湧水を利用して水田、畑が作られ、その間に集落が散在している。

沢の田遺跡は権現岳より続く尾根上の先端に位置し、標高 870 メートルほどの南面する緩傾斜に立地し、現地目は畑地と水田となっている。

2. 周辺の遺跡（第1図）

小瀬沢町は山梨県内においても有数な原始、古代文化を現在に伝えるところの遺跡が豊富に群在しているところである。以下、沢の田遺跡の周辺にみられる遺跡を若干ししておく。

1. 上前後沢遺跡（縄文時代前期、平安時代）
2. 下前後沢遺跡（縄文時代中期、平安時代）
3. 岩窪遺跡（縄文時代前期、中期）
4. 上宮原遺跡（縄文時代中期）
5. 竹原遺跡（縄文時代中期、平安時代）
6. 宗高遺跡（縄文時代中期、後期）
7. 中原遺跡（縄文時代中期、後期、平安）
8. 上井詰遺跡（縄文時代前期、中期、後期）



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

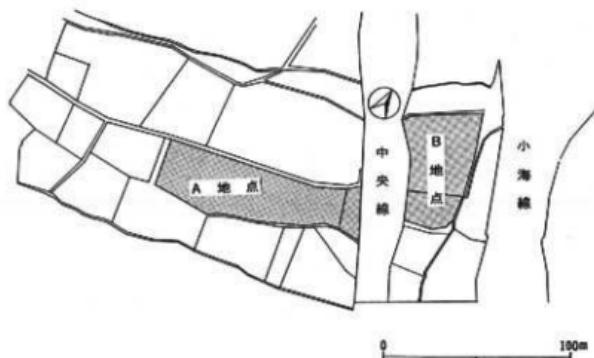
II 調査の経緯と経過

昭和57年度に山梨県教育委員会文化課は、昭和58年度実施予定の小瀬沢町岩久保地区県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財の有無を確認のため、町教育委員会の職員と共に同地区を踏査の結果、字沢の田の畠地に縄文時代中期の土器片が散布することが認められたため、踏査の結果をふまえ、当該遺跡の措置について、山梨県教育委員会、県北土地改良事務所、町教育委員会の三者で綿密な協議を重ねた結果、圃場整備事業の前に全面的な発掘調査が心要であるとの結論に達し、県北土地改良事務所の委託を受けて、町教育委員会が昭和58年4月12日より8月2日まで発掘調査を実施した。

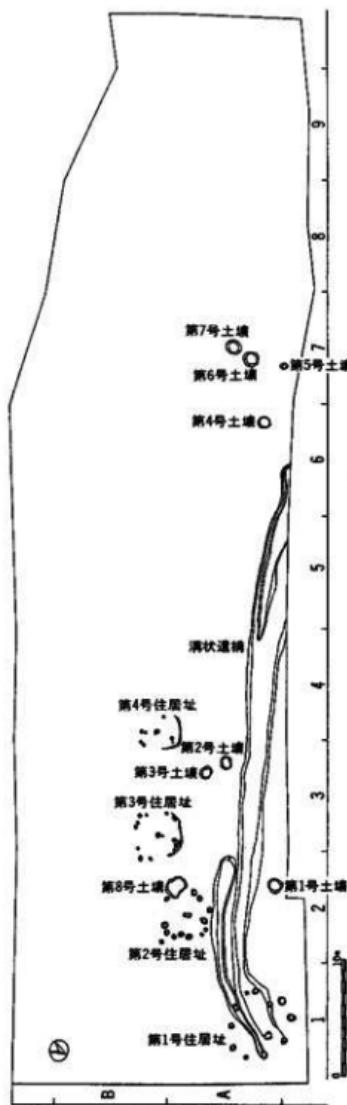
沢の田遺跡は、国鉄中央線によって二ヵ所に分断されており、南側をA地点、北側をB地点とした。調査方法は、A地点はグリット法式とし、10m四方のグリットを設定し、北西から北東へ1～9区、北から南へA～Bとし、例えればA-1と呼称した。B地点は、水田であるために北東側で耕作土が厚く堆積していることからトレンチ方式を採用し、幅2m×長さ4.5～11mのトレンチを北西から北東に8本（第1号トレンチ～第8号トレンチ）設定した。A地点は、表土を重機により排土し、その後全域を人力で構造確認面まで掘り下げた。B地点は重機は使用せず人力だけで掘削し、遺構が確認された段階でトレンチを拡張する方法をとった。

沢の田遺跡の基本土層

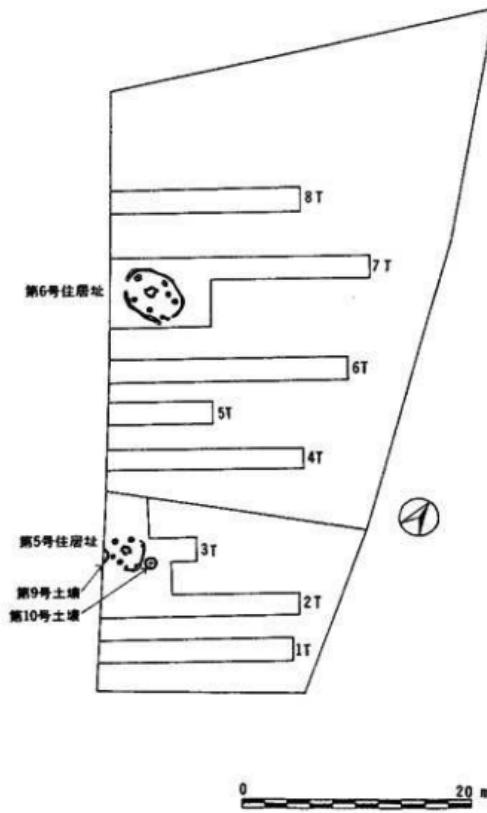
A地点（畑） 第1層 表土層 第2層 ローム層 B地点（水田） 第1層 表土層 第2層 床土 第3層 黒褐色土層 第4層 ローム層



第2図 沢の田遺跡 A地点・B地点



第3図 A地点遺構配置図



第4図 B地点遺構配置図

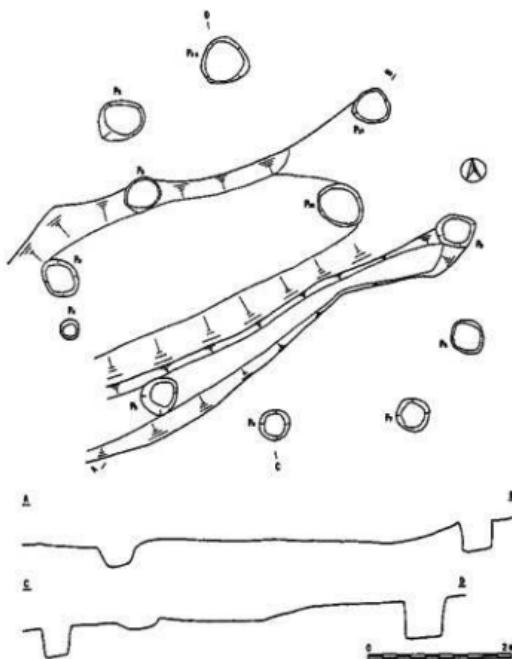
III 遺構

1 住居址

第1号住居址（第5図、図版2）

本住居址は、A地点の北西隅に位置する。耕作の際に削られ、溝状遺構にも切られているために、遺存状態は非常に悪く、壁、床面、炉址は確認できなかった。平面形も又不明である。柱穴は径約45cm程度のものが大部分をしめ、深さは約20~52cmを呈する。

出土遺物は少なく、ミニアチュアの浅鉢片と打製石斧1点が出土している。



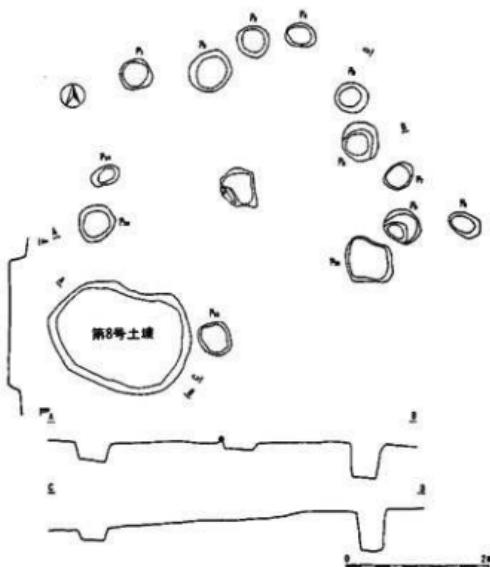
第5図 第1号住居址

第2号住居址（第6図、図版2）

本住居址は、耕作のために壁が削平され、従ってどのような平面形であるか不明である。柱穴は炉址を中心にはほぼ円形にまわり、13本が確認されている。柱穴の径は35~60cm、深さは20~60cmを測る。床面は全体に軟弱である。炉址は中央にあり、50cm×51cm、深さ10cmの規模を

有する。炉石は南側の2石を残しているのみである。炉址内の土層は第1層、焼土、炭化物を含む黒褐色土層、第2層、焼土、炭化物、ロームを多く含む黒褐色土層、第3層、ロームブロック、第4層、ローム混り黒褐色土層で、底のロームはかなり赤変していた。周溝は検出されなかった。

出土遺物は土器1点と石匙2点が出土している。

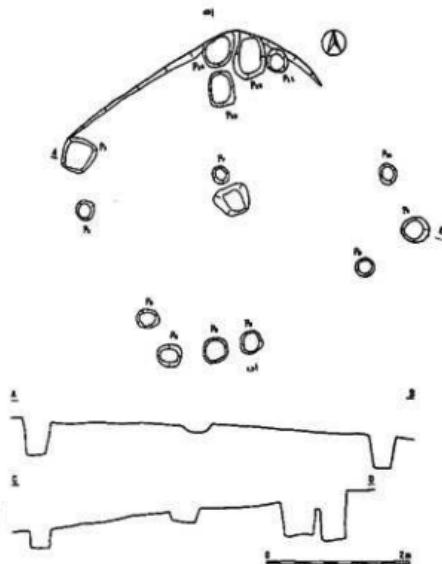


第6図 第2号住居址実測図

第3号住居址（第7図、図版3）

本住居址は東西側と、南側が削平されているので正確な平面形は把握できないが、柱穴の配置より類推すると、南北約4.5m、東西約5mの橢円形を呈していたものと思われる。壁高は北壁で約10cmほどの高さをもって立ち上がる。床面はロームを踏み固めて堅く、南側では傾斜を呈し、軟弱である。炉址は住居址のほぼ中央の位置に設けられており、45cm×40cm、深さ20cmで、不整円形のピットとして遺存する。炉石は全部抜き去られていた。柱穴は14本確認されているが、そのうち主柱穴は配置からみて、P₁、P₂、P₃、P₄、P₅の6本、P₆、P₇、P₈、P₉、P₁₀、P₁₁、P₁₂は補助柱穴であろう。柱穴は径25～60cm、深さ25～70cmを測る。

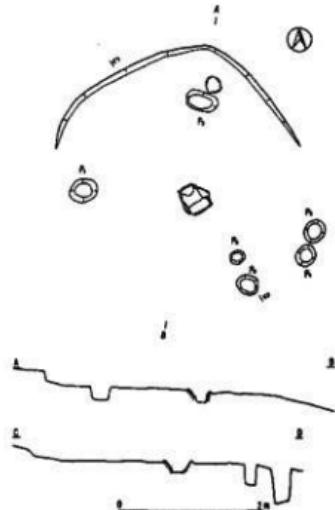
出土遺物は少なく、炉址内より土器片1点出土している。



第7図 第3号住居址実測図

第4号住居址（第7図、図版4）
 本住居址は南側が削平されているため平面形は明らかでないが、現存部より推して4m×3.2mの縦長橢円形を呈すると思われる。壁高は約5～15cmである。床面は炉址周辺が堅緻であり、他は若干軟弱である。周溝は検出されなかった。炉址は中央に位置し、4個の石を用いた台形石圍炉址内の堆積は2層よりなる。第1層は焼土、ロームを含む黒褐色土層、第2層が焼土、炭化物を多く含んだ黒褐色よりなっている。なお炉石は若干の焼成をうけているにすぎなかった。柱穴は6本確認され、径20～45cm、深さ18～50cmの円形を呈す。P₄とP₆はその位置から入口部のための柱穴であろう。

出土遺物は非常に少なく、浅鉢片1点と横刃形石器1点が出土している。



第8図 第4号住居址実測図

第5号住居址（第9図 図版4）

本住居址はB地点の第3号トレンチで検出され、水田耕作のため西側、北側、南側の壁の検出はできなかったが、柱穴の位置、残存した床面からその平面形は3.5m×3.2mの不整四形を呈するものと思われる。周溝はない。床面は全体に軟弱である、炉址は円礫状の石を並べて50×50cm位の長方形の石囲炉を構築している。炉址内の堆積は単層で、黒褐色土層を呈し、焼上は若干認められる程度であった。柱穴は7本確認され、7本ともに主柱穴となろう。柱穴の径は18~55cm、深さ35~40cmである。

出土遺物は浅鉢片2点と打製石斧2点、石匙2点が出上している。

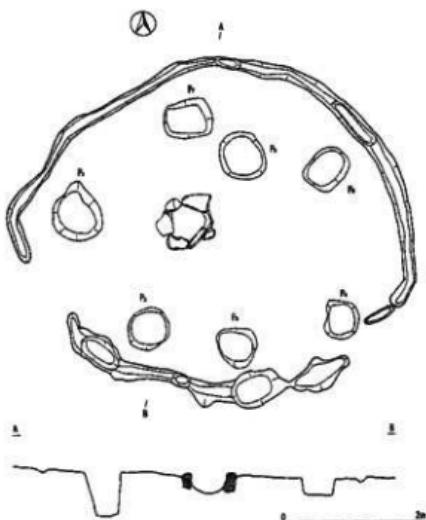


第9図 第5号住居址実測図

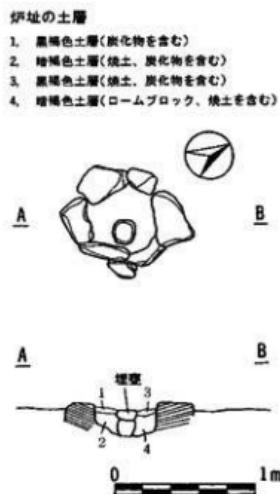
第6号住居址（第10図 図版5）

本住居址の平面形態は径4.85×5.7mの東西に長い椭円形を呈する。壁は4~5cmで遺存状態はよくない。壁の直下には幅約25cm、深さ10cm、断面U字状を呈する周溝が認められる。床面は堅く踏み固められており、床中央部ことに炉址周辺部に著しく、そして、南に向かっていくぶん傾斜する。柱穴は7個検出され、径51×85cm、深さ25~51cmで円形と方形を呈するものがある。炉址は75×80cmの石囲埋甕炉で中央よりやや南に位置し、河原石（最大石36×20cm、量小石15×10cm）8個をもって囲み、そして中央部に埋甕施設を有す。炉石は約各が床面に埋め込まれ、埋甕は底部を欠き、火熱をうけたためか土器の表面の一部は剝離している。遺物

は炉址内の埋甕のほか、深鉢2点が床面に密着した状態で出土した。石器では打製石斧7点、磨製石斧2点、横刃形石器1点、石匙1点出土している。



第10図 第6号住居址実測図



第11図 第6号住居址炉址実測図

2 土 壤

10基を確認した、10基のうち2基は時期が判明したがあとの8基は不明である。台地全体にわたる調査ではないので、集落の中に占める位置は不明であるが、散在的なり方であるといえよう。

第1号土壌（第12図1）

平面は、 $12.5 \times 13.0\text{cm}$ の方形であり、深さ35cmで、壁は外傾し断面はタライ状を呈する。遺物は出土しなかった。

第2号土壌（第12図2）

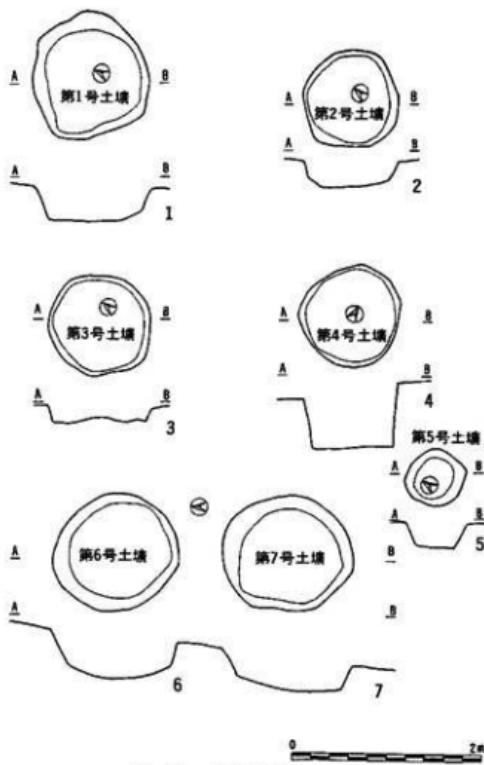
平面形は $100 \times 100\text{cm}$ の不整円形で断面はタライ状を呈する。壁は外傾を呈し、底はほぼ平坦である。遺物は出土しなかった。

第3号土壌（第12図3）

平面形は $98 \times 110\text{cm}$ で不整形を呈する。壁はいくぶん外傾し、断面は1と2の土壌と同様にタライ状を呈し、底は平坦である。遺物は出土しなかった。

第4号土壙（第12図4）

平面形は $100 \times 110\text{cm}$ 、深さ70cmの円形で、壁は直壁に近く、底は平坦である。出土遺物は底部はないが、ほぼ完形の縄文時代前期末葉の土器が出土した。



第12図 土壙実測図

第5号土壙（第12図5）

平面形は $50 \times 51\text{cm}$ 、深さ25cmの円形を呈し壁はやや外傾する。遺物は出土しなかった。

第6号土壙（第12図6）

平面形は $125 \times 130\text{cm}$ 、深さ40cmの円形の土壙である。壁は北側で外傾し、南側で直に近く、底は平坦でなく壁際にスロープをもつ。遺物は出土しなかった。

第7号土壙（第12図7）

$125 \times 140\text{cm}$ 、深さ35cmで平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

第8号土壙（第6図）

$140 \times 200\text{cm}$ 、深さ15cmで平面形は不整規円形を呈する。

底は平坦である。遺物は出土しなかった。

第9号土壙（第9図）

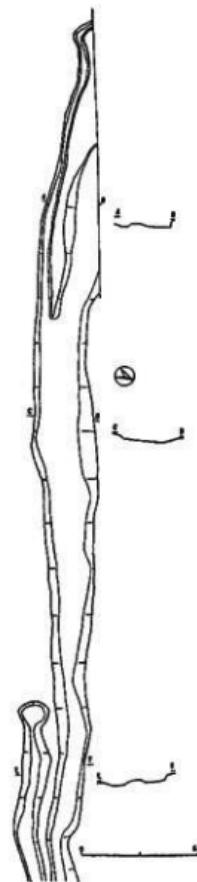
土壙の南側半分は道路に接しているため調査することができなかった。規模は径120cmで深さ32cm、平面形は円形を呈するものと思われる。遺物は出土しなかった。

第10号土壙（第9図）

平面形は $100 \times 100\text{cm}$ の円形を呈する。壁は直に近く、ローム面より30cmほど掘り込んでいる。底の中央に $30 \times 35\text{cm}$ のピットが穿たれている。遺物は縄文時代中期初頭の土器片2点が出土した。

3 溝状遺構

溝は幅0.56～3.1mで断面はゆるやかにカーブし、U字形を呈し、溝底は平らであり深さ5～20cmであった。出土遺物は見られず時期は不明である。



第13図 溝状遺構実測図

IV 出土遺物

1 土器

上器はすべて繩文式土器で、長い間にわたる耕作のため、包含層は大きく擾乱されており、このため土器を層位的に分類することができず、文様による分類を行なった。

第1群土器（第16図1、図版12）

〔前期末葉の土器〕 第4号土壙より出土した土器である。

器壁はきわめて薄く、焼きの堅い上器である。口縁部には粘土紐を貼付けその上に半截竹管施文具により結節状浮線文が施され、口唇部内側に輪状にした粘土紐を密に貼付けている。結節状浮線文の粘土紐の下にはソーメン状貼付文といわれる細い粘土紐を器面に縦位に貼付け、頸部に三本の結節状浮線文を施した細い粘土紐めぐらし、又胴部に結節状浮線文をもつ粘土紐一本を波状に貼付けている。地文は繩文LRである。色調は茶褐色を呈する。

第2群土器（第16図2、3）

〔中期初頭の土器〕 第10号土壙より出土した土器である。

1は口縁部に連続瓜形文を施し、以下を半截竹管による影の深い三つの平行沈線で三つに区分し、二段目に鉤衝状文がみられる。焼成はよく、色調は黒褐色を呈する。

2は口縁部直下に連続瓜形文を施し、その下に平行沈線が横走する。色調は1と同様に黒褐色を呈する。

第3群上器（第14図2、3）

〔中期前半の土器〕

2は刻みをもつ隆帯に沿って、キャタピラ文がみられ、キャタピラ文の下に丸棒状の工具による波状沈線が施されている。色調は暗褐色を呈する。

3は口縁が外に屈曲するもので、通称角押文といわれている半截竹管の押引連続文が施される土器片である。色調は黄褐色を呈する。

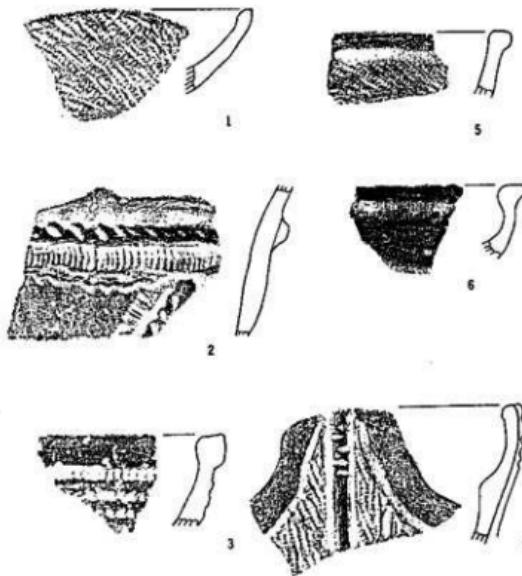
第4群土器（第14図1、4、5、6、7、 第15図1、2）

〔中期中葉の土器〕

1はミニチュアの浅鉢形土器である。LRの斜繩文が施されている。色調は黒褐色を呈する。

4は口縁が外に屈曲する器壁の比較的薄い口縁部破片である。5、6ともに口縁が外に屈曲する浅鉢形土器である。7は波状の口縁部に連続瓜形文を刻み、胴部は縦位に貼付けたひねり状隆帯によって4分割され、その間に粘土紐状の隆帯により人体文風の装飾がみられる。8は波状口縁部で刻みをもつ隆帯が縦位に貼付けられている。

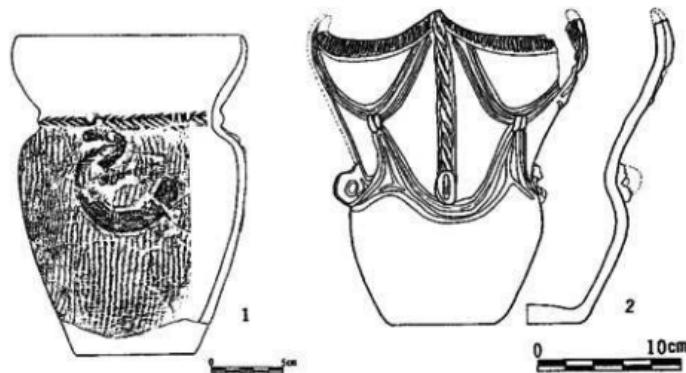
第15図の1は第6号住居址の炉内より出土した灰陶殻土器である。口縁部は無文帶で、頸部に矢羽根状の刻みを施している。又胴部には蛇体文の隆帯が貼りつけられている。



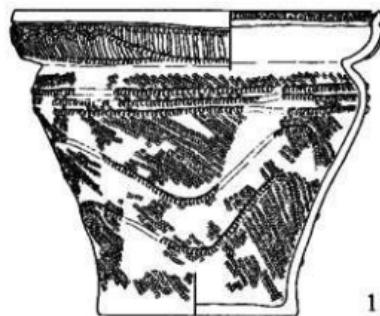
第14图 住居址出土遗物

第1号住居址(1)、第2号住居址(2)
第3号住居址(3)、第4号住居址(4)
第5号住居址(5,6)、第6号住居址(7)

0 10cm



第15图 第6号住居址出土遗物



0 10 cm 第4号土塚出土遺物



0 5 cm 第10号土塚出土遺物(2,3)

第16図 土塚出土遺物

2 石器

本遺跡から出土した石器は、打製石斧11点、磨製石斧3点、横刃形石器2点、石匙5点である。

1. 打製石斧（第17図1～11）

大部は平面の形が短冊形を基本とするもので、刃部に近い下半部がやや広がる。

1は頭部幅と刃部幅の差がない、石質は硬砂岩である。2は頭部で厚く、刃部で薄くなる。石質は粘板岩である。3は頭部幅と刃部幅が大きく側辺が内曲せず直線的であり、石質は粘板岩ホルンフェルスである。4は粗く剥離されており、粗雑な作りであり、石質は粘板岩である。5は比較的大形の完形品で石質は硬砂岩である。6は両側の縁の加工が顕著で、石質は粘板岩ホルンフェルスである。7は全体に粗雑な作りで、頭部に比べ刃部幅に最大幅があり、石質は粘板岩ホルンフェルスである。8は硬砂岩の比較的重い石斧で刃部は厚い。頭部を欠いている。9は1から8の短冊形とは違い、柳葉形で、粗雑な作りであり、石質は硬砂岩である。10は裏面に自然面を残し、側縁はよく調整されている。石質は粘板岩ホルンフェルスである。11は撥形を呈し、刃に丸味をもつ。石質は粘板岩である。

2. 磨製石斧（第17図12～14）

第5号住居址1点と第6号住居址2点の3点出土した。

12は乳棒状の石斧で、縦位に研磨されている。石質は輝岩である。13は破損品であり、12と同様に縦位に研磨される。石質は輝岩である。14は扁平状に研磨し、先端には打痕が残る。石質は粘板岩である。

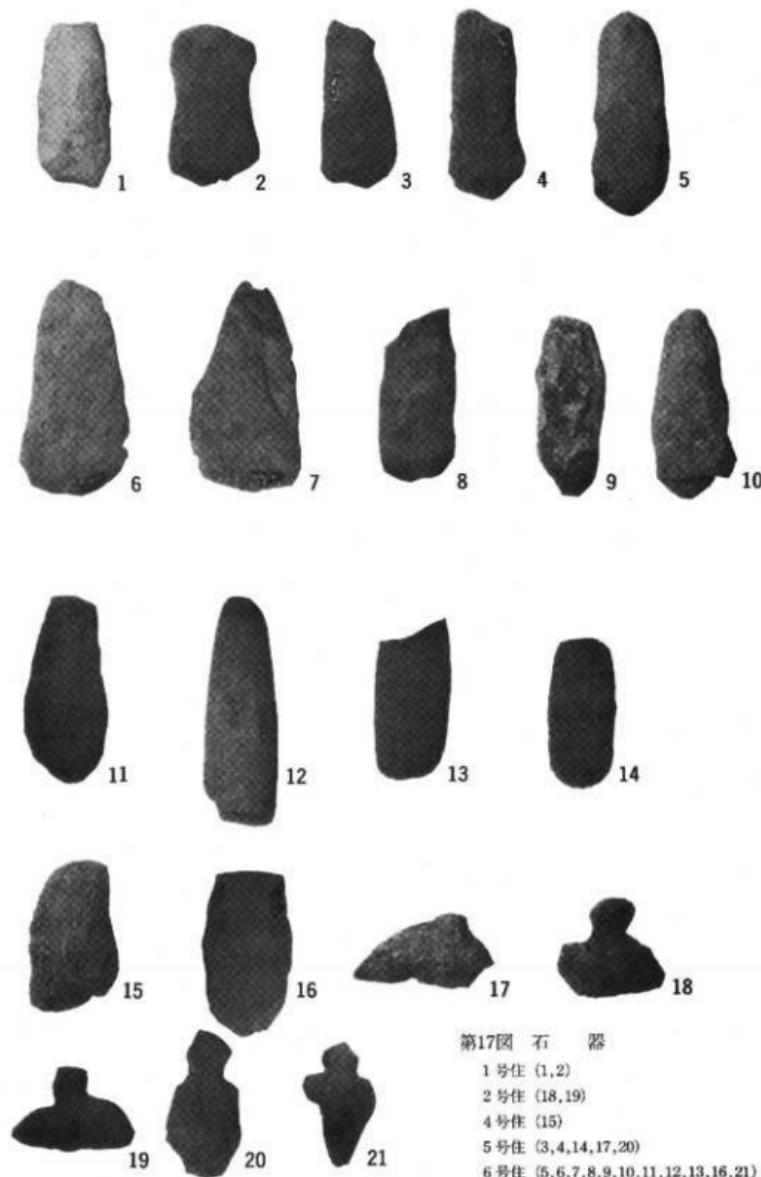
3. 横刃形石器（第17図15～16）

15は一部に平坦な自然面からなる打面を残している。石質はスレートである。16は刃は薄く、石質は粘板岩ホルンフェルスである。

4. 石匙（第17図17～21）

刃部が横長のもの（17～19）と刃部が縦長のもの（20～21）がある。

17はつまみ部が欠損し、全体に作りは粗い、石質は粘板岩ホルンフェルスである。18は横長の剝片を素材としている。石質は粘板岩である。19はつまみ部が刃部に対してわりに大きく、全体に形の整ったもので、石質は粘板岩である。20はつまみ部の両側を抉り込むような調整剝離を行ないつまみ部を作られている。21は刃部が片刃で、つまみ部、刃部共に細かい調整剝離によって形を整えている。石質は粘板岩ホルンフェルスである。



第17圖 石 器

1号住 (1,2)

2号住 (18,19)

4号住 (15)

5号住 (3,4,14,17,20)

6号住 (5,6,7,8,9,10,11,12,13,16,21)

V まとめ

住居址について

今回の調査で検出された住居址は6軒である。平面形態は削平された住居址もあり、不明な点もあるが、柱穴、炉址の配置から想定し、円形と橢円形に分けることができる。時期的な形態の変化については、削平のため出土遺物が少量であり、住居址の時期決定が極めてむずかしいことから不明である。しかし、炉址についてみると、若干の変化が認められる。6軒の住居址のうち石圓の炉石が完存していたのは4、5、6号住の3軒で、第4住居址の石圓炉は4枚の石を使用した方形を呈する炉である。第5号住の炉は、礫状の石を並べて構築した石圓炉で、第6号住の炉は8枚の河原石を平たく並べて円形の石圓炉を構築している。以上のように、3軒の住居址で炉址の変化が認められる。時期が判明した住居址は、井戸尻Ⅲ式の土器を石圓炉址内に埋設してあった第6号住居址だけである。

土壤について

本遺跡から土壤は10基検出された。10基のうち時期の判明した土壤は2基で、縄文時代前期末の第4号土壤と中期初頭の第10号土壤である。縄文時代に見られる土壤の用途として、墓壙、貯蔵穴、落し穴、粘土の採掘場などが考えられる。本遺跡で検出された土壤にあてはめて検討してみると、土壤の形態、規模、覆土の堆積状態、分布などから、6基の土壤は墓壙または貯蔵穴として構築されたものと考えられる。

土器について

本調査で検出された土器は前期末から中期中葉までであり、前期末の土器と中期初頭の土器は土壤から出土したもので、中期前半～中期中葉の土器は住居址から出土したものである。

第1群土器 1群はLRの単節縄文地文に結節状浮線文を施す細い粘土紐の貼付けを特徴とする土器で長野県富士見町籠畠遺跡の10号住居址出土遺物に見ることができる。武藤雄六氏のいう籠畠I式にあたるものである。関東では十三菩提式に比定され、前期末の信濃的な様相を強くもっている。

第2群土器 2群土器は中期初頭に位置されるものである。口唇部に瓜形文をもち、口縁部に平行沈線を施す土器で、五領ヶ台式に相当するものと思われる。

第3群土器 3群土器は中期前半に位置される。3は口縁部の下に角押文が施されるもので八ヶ岳山麓で猪沢式と呼称される土器である。2は隆帯に沿ってキャタピラ文がめぐる、所謂新道式と呼ばれる土器である。

第4群土器 4群は中期中葉に位置されるもので、第4号住居址出土土器は藤内I式に、第1号住居址出土のミニチュア土器、第5号住居址出土の浅鉢形土器は藤内II式に比定される。また第6号住居址出土の土器は隆線による連弧状文を脇部にもつ土器等があり井戸尻Ⅲ式に比定される。

* 参考文献 *

- 1968年 武藤雄六 「長野県富士見町龍畠遺跡の調査」考古学集刊第4巻1号
- 1971年 桶口清之他 「十三菩提遺跡」 埼玉文化財発掘調査報告2 神奈川県教育委員会
- 1974年 河西清光他 「扇平遺跡」 長野県岡谷市扇平遺跡発掘調査報告 岡谷市教育委員会
- 1974年 末木 健 「中原遺跡・上平出遺跡」 山梨県中央道理蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 一北巨摩郡小淵沢町地内一 山梨県教育委員会
- 1977年 末木 健 「寺平遺跡」 勝沼バイパス道路建設に伴う寺平遺跡発掘調査報告書 山梨県教育委員会
- 1978年 武藤雄六他 「曾利遺跡」 第三、四、五次発掘調査報告書 長野県富士見町教育委員会
- 1979年 末木 健他 「小淵沢町遺跡分調査報告書」 小淵沢町教育委員会
- 1980年 米田明訓 「南信天竜川沿岸における縄文時代中期後半の土器編年」 甲斐考古第17の1分
- 1983年 末木 健 「小淵沢町の原始・古代」 小淵沢町誌
- 1984年 山口 明 「中部地方における前期末葉土器と鍋屋町式土器」 長野県考古学会誌48

図版



沢の田遺跡
A地点



沢の田遺跡
B地点



発掘風景

第1号住居址



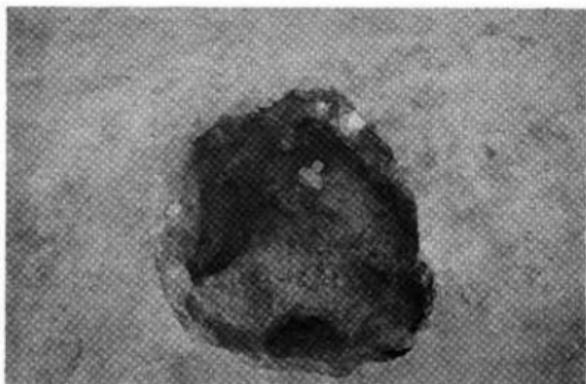
第2号住居址



第2号住居址
炉址



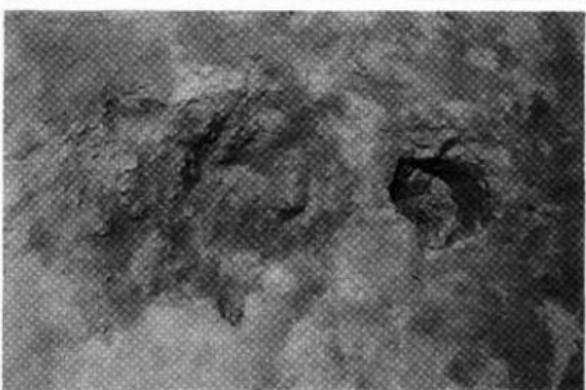
第2号住居址
石匙出土狀態



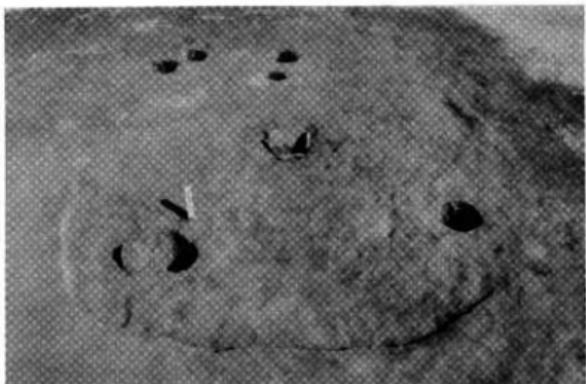
第3号住居址



第3号住居址
爐 址



图版 4



第4号住居址



第4号住居址
炉址



第5号住居址

第5号住居址
炉 址



第6号住居址
炉 址



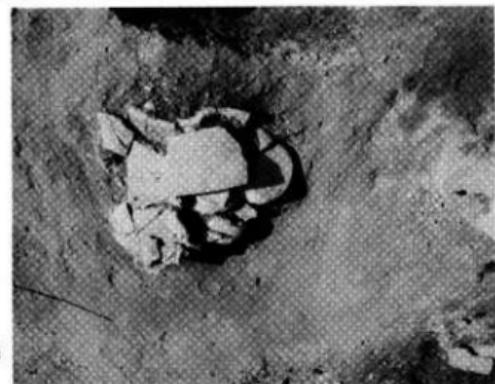
第6号住居址
炉 址



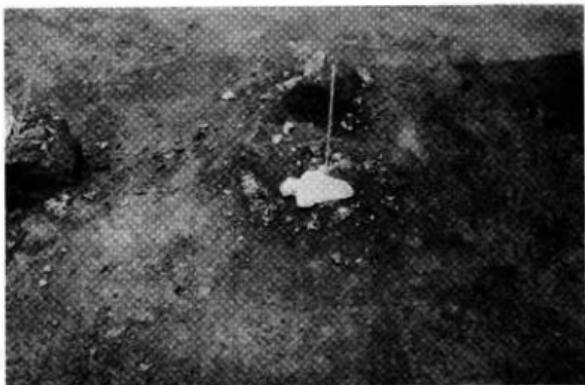
第6号住居址
炉 址

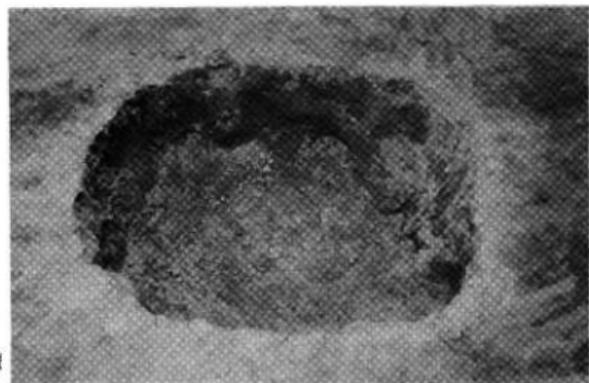


第6号住居址
遺物出土状態

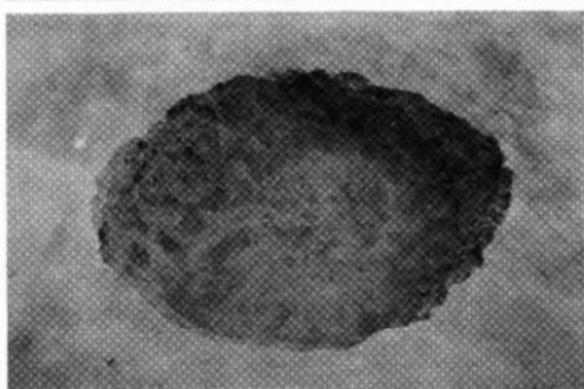


第6号住居址
石匙出土状態

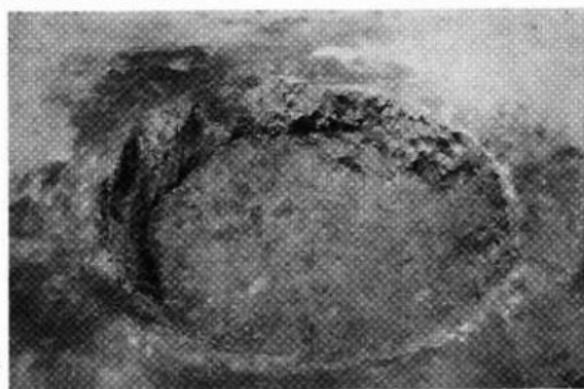




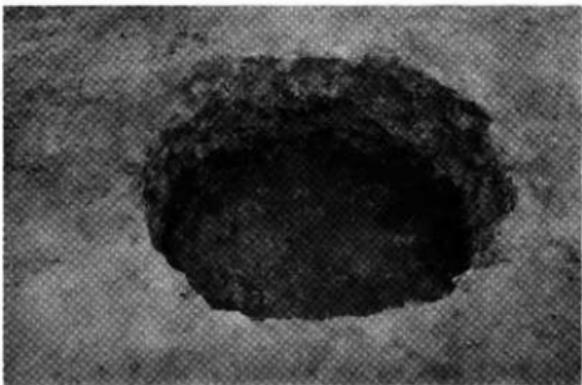
第1号土壤



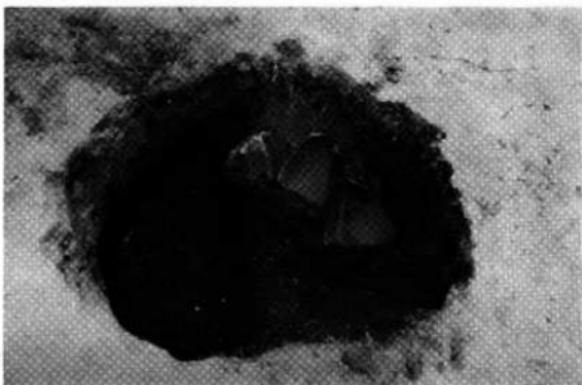
第2号土壤



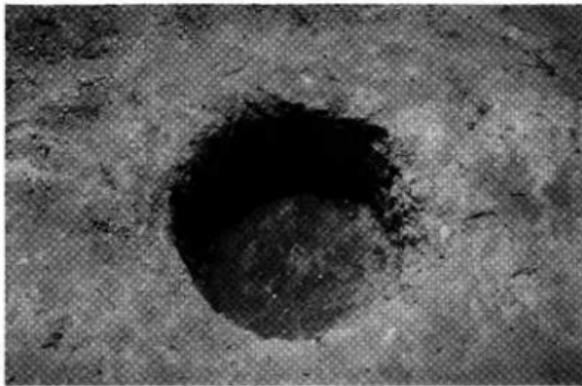
第3号土壤



第4号土壤



第4号土壤
遺物出土状態

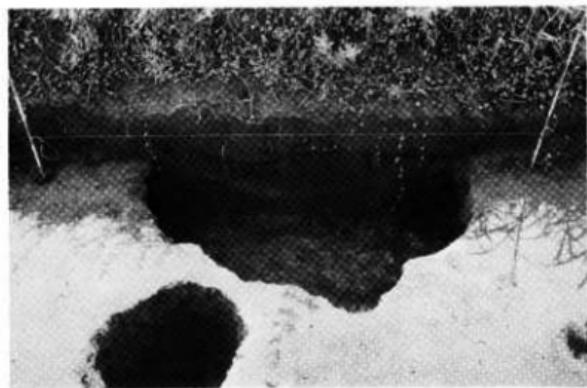


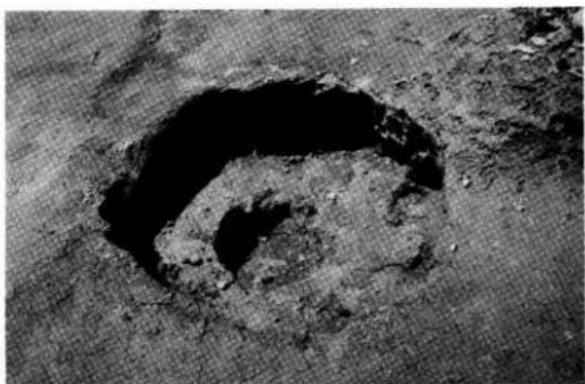
第5号土壤

第6号土壤



第7号土壤







住居址・土壤出土遺物

- 1, 第1号住居址 2, 第2号住居址
3, 第3号住居址 4, 第4号住居址
5, 6, 第5号住居址 7, 8, 第6号住居址
9, 10, 第10号土壤



第 6 号 住居址 出土 遺物



第 4 号 土 壤 出土 遺物

小瀬沢町埋蔵文化財調査報告書第2集

沢の田遺跡

昭和59年3月25日 印刷

昭和59年3月31日 発行

編集・発行 山梨県北巨摩郡小瀬沢町宮久保

小瀬沢町教育委員会

印刷所 峠北印刷株式会社

